

## あしよろ・ハードサポート通信

例年よりも暑さが厳しかった夏も終わり、季節は秋へと移っています。朝晩も涼しくなり牛にとって快適な気候ではありますが、この時期は夏場の反動で免疫力が落ちやすく、特に乳房炎には注意が必要です。

### ◆ その乳房炎の原因菌は？

乳房炎とは何らかの理由によって病原菌が乳房内に侵入し、炎症が起こることです。乳房炎を引き起こす原因菌には多くの種類が存在し、大きく分けると伝染性と環境性の2種類があります。対策や治療法は原因菌ごとによって異なりますので、もし乳房炎が発生したときにはまず原因菌が何であるかを把握することが大切です。



### ◆ 主な伝染性の乳房炎原因菌

伝染性の乳房炎原因菌は、感染牛の乳汁から搾乳機器や搾乳者の手、タオルなどを介して他の牛に乳房炎を引き起こします。代表的なものは黄色ブドウ球菌（SA）であり、正確に言うと「菌」ではないですがマイコプラズマも伝染性に該当します。

#### ●黄色ブドウ球菌（SA）

乳房内へ侵入するとバイオフィルム（膿瘍）を形成するため、難治性や慢性の乳房炎に移行しやすくなります。SAは乳頭の傷やカサブタに生息すると言われており、過搾乳による乳頭口スコアの悪化を起こさないように管理することが第一の対策となります。バルク乳スクリーニング検査でSAが検出された場合は、該当牛を早期摘発して最後に搾乳するなど他の牛へ感染させないようにしましょう。



#### ●マイコプラズマ

感染力が非常に強く、複数分房が同時に感染したり、瞬く間に他の分房へも感染するとも言われています。通常の原因菌検査では菌なし（NG）と判定されるため、気づいた時には牛群に蔓延していることもあります。上記の特徴から、バルク乳スクリーニング検査で検出された場合は速やかに全頭検査を行って該当牛を摘発し、隔離や繋ぎ替え、淘汰を行うことが望ましいとされています。

## ◆ 主な環境性の乳房炎原因菌

環境性の乳房炎原因菌は、乳牛が飼養されている環境に生息しており、様々な原因によって乳房内に侵入し、乳房炎を引き起こします。特に牛床衛生や搾乳衛生の状態と関係が深いとされており、牛体を汚れないように管理すること、搾乳時は厳格に乳頭を拭き取ることが大切です。

### ●環境性レンサ球菌（OS）

Streptococcus uberis など多くの種類が存在し、十勝管内においては臨床型乳房炎の中で多く検出される傾向となっています。麦稈などのネワラに多く生息し、急性や難治性、慢性の乳房炎を引き起こします。排菌数が非常に多く、体細胞数が高くなることが特徴で、現場では前搾りでブツが確認されなくても体細胞数が100万を越えることがあります。対策と

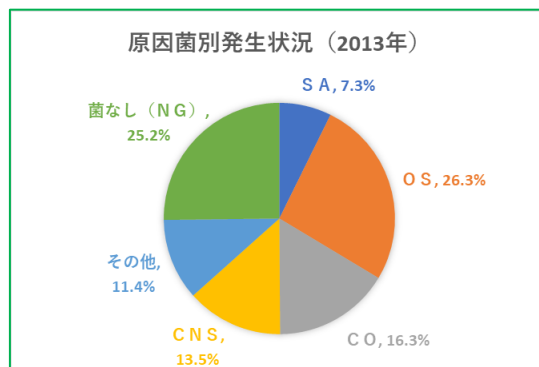
しては牛床衛生の徹底、治療の際は獣医さんと相談のもとロングスパンでの抗生物質投与を行ってみてください。

### ●大腸菌性乳房炎（CO）

夏場や秋口にかけて牛の免疫力が低下する際に発生率が高まります。大腸菌は糞中に多く含まれており、発症すると重篤な甚急性乳房炎を引き起こしたり、毒素によるショック症状で牛が死に至ることもあります。早期に発見して頻回搾乳や乳房洗浄などの処置を行うことで治癒率を上げることができるとされています。また、ワクチン接種による重篤化の防止も対策の一つです。

### ●コアグラージェ陰性ブドウ球菌（CNS）

乳頭皮膚に常在しており、発症しても症状は比較的軽く、抗生物質による治療も有効と言われています。しかし、時に慢性へ移行することもあるため注意が必要です。



十勝 NOSAI、十勝乳房炎協議会：Mastitis Control II より加筆引用

## ◆ 乳房炎は全て同じものではない

今回は主要な乳房炎原因菌について触れましたが、これらは一部にすぎません。現場では乳房炎を早期発見してすぐに抗生物質を注入する場合がありますが、原因菌の中には抗生物質が効かないものも存在します。乳房炎が発生したときは、その分房が新規感染なのか再発なのかをチェックし、特に新規感染の場合は原因菌の検査を行いましょう。牛群において乳房炎が多いときは、ターゲットとなる原因菌の特徴を見極め、搾乳手技も含めて牛群全体での対策や治療方針を決めることが大切なポイントです。



(市川雷太)